

アカシア夜話

アカシアンナイト
第11話

(科学学級4年生の被爆)



昭和19年(1944年)9月「戦時頼才(えいさい)教育機関設置に関する建議案」が衆議院にて可決され、同年12月、文部省は「科学に関し高度の天分を有する学徒に対し特別なる科学教育を施し我国科学技術の飛躍的向上を図らんが為之が実施に関する方途を研究せんとす」として、東京高師、東京女高師、広島高師の各附属国民学校(現在の小学校)、附属中学校(現在の中・高等学校)、及び金沢高師に属するものとして、石川師範附属国民学校、石川県立第一中学校に特別科学学級を設置しました。

これを受け、母校は昭和20年1月に編入試験を実施、1月20日より1～3学年に各1学級の科学特別学級を開設、授業を始めました。この時、東京高師附中などでは在學生から選抜したのに対し、母校では西日本一円から広く生徒を募集、第1期生(3年生)31名のうち18名は他校からの編入になりました。このことが以後、正規学級の生徒と軋轢を生むもととなります。

4月になり1期生が4年生となって、最上級生となりました。(昭和19年より、旧制中学は5年制から4年制に変更。第10話参照。)既に正規学級の3・4年生は、軍需工場での勤労奉仕に動員されて学校を離れており、さらに1・2年生も、勤労奉仕で学校を離れる事が多くなっていました。学校に留まって授業を行っていた科学学級も、6月末には1～3年生99名が、比婆郡東城町に疎開。他校の生徒が動員される中、疎開が難しかった正規学級の1・2年生も、7月には「農村動員」と言う名目で、賀茂郡原村、豊田郡戸野村に疎開。そして、学校に残って授業を受けるのは科学学級4年生のみとなり、8月6日を迎えました。

当時のお話を、科学学級1期生で京都在住の山野上純夫さん(38回)に、伺いました。

入学試験・授業

山野上：私は附属にお世話になって、良い教育を受けさせてもらったと思っています。ただ、附属に対する母校意識というか、帰属意識が非常に薄いのです。広島県人でないためなのかな。新井君(俊一郎、41回)とか高田君(勇、41回)とかに引っ張り込まれて、まあ少しは母校が懐かしい気持ちに、なっていますけれど。私は間違っただけで附属に入ったんだ、と思うので。

甲斐：優秀な人が科学学級に入られたはずだから、そんなことは…。山：私はなぜ選ばれたのか、よくわかりません。特に平素の成績が良いわけでは

ない。でも、試験の出来はわりに良かったらしいのです。編入試験問題の一つに「神様がもう一つ目を下さったら、お前はどこにつけるか」という問いがありました。指先につけるとか、頭の後ろにつけるとかという答えが多かったらしい。でも指先に目があると手の動きを妨げる。後ろを見る目は脳の構造を複雑にする。私は三つ目小僧のように額に着けて、立体感が分かるようにしたいと答えました。甲：それが良かったのですか？山：そうですね。



山：その当時、工場に動員された者の始業が午前7時です。それに合わせて、科学学級も7時始業でした。それで、午後4時ぐらゐまで授業がありました。午前4時間、午後4時間。1コマ2時間ずつだったと思います。指導の責任者は文理大(旧制広島文理科大学)の三村剛昂(よししたか)教授(理論物理学)で、文理大や高師の先生から、微積分や解析幾何、物理学や有機・無機化学、生物学などを教わりました。授業中、学術用語が出てきたら必ず原語を教わるように、躰られました。大部分は、旧制高校の1年生ぐらゐの数学や物理、化学だったですね。

軋轢(あつれき)

甲：あえてお尋ねします。科学学級と正規学級の間には軋轢があったとか。

山：科学学級の1期生として編入されたのは31名でしたが、附属中学校から転じた13名の他に18名は他校からの編入となりました。昭和20年1月から3年生として編入されたのですが、4月の4年生進級とともに、附属中学出身の3名が海軍兵学校に行きました。正規学級の生徒にしてみれば、科学学級の半数を超える他所からやって来た者が、突然同じ最上級生として加わったのです。また、正規学級は全部動員で、学校を離れているのに、科学学級だけは学校で授業を受けているのです。この様な事から科学学級と正規学級の間ではいろいろな軋轢が生じました。

東京高師附中など他校の科学学級では、校内のみを選考の対象にしたり、事前の配慮に努め、軋轢を予防したそうです。また、2期生以下の科学学級も昭和20年6月には東城に疎開して科学学級のみで集団生活を送ったため、我々とは事

情が違うようです。正規学級の1・2年生もそれぞれ疎開して行き、正規学級の3・4年生は動員されて勤労奉仕。科学学級4年生のみが学校で授業を受けている状態になっていました。

そしてある日の朝、内容を伏せますが教室を変えざるを得ないような事件が起こりました。

被爆

山：だが、その教室替えが幸いして、爆風を直接受けずにすんだのです。海軍兵学校に行った3人を除く28名から、さらに2人休学して、26人が同じ教室で、原爆に遭(あ)いました。私は運良く、すぐ這い出しましたが、皆、校舎の下敷きになりました。這(は)い出した者で、尾道中学出身の赤松光君の指図のもと、有機化学の授業をしていた増本文吉教授や級友の救出をしました。加藤(恭三)君は、押しつぶされて即死していました。それから、姫路から来ていた光明(幹郎)君が、重傷を負い、15日後の21日に亡くなりました。だから原爆で直接亡くなったのは、2人です。24人まで助かったのはラッキーだったとも言われますが、生徒としての行動中の死亡は全校でこの2人だけです。他に課外活動中の1・2年生4人が亡くなっています。やがて高師の校舎の一部から火柱が上がり、方々からも火が燃えて来るから、私は鷹野橋から比治山橋へ行く広い道路を通過して、比治山橋の西詰めの自宅へ向かって、逃げたのです。その方向には、皮膚がただれて垂れ下がったような人はいませんでした。ただ、怪我(けが)をして痛いというような人は、たくさん見ましたけれど。私の母親と弟、妹は、4月に加計町に疎開して、広島市内にいたのは、父親と私の2人だけでした。父親も、怪我もほとんど無しに助かりました。ですから、幸いにも私は、原爆で家族を失っていないのです。翌日、爆心地を通りました。それから、横川駅へ出て可部線の電車に乗り、8日の午後には、加計町に疎開をしている家族の所に着きました。加計では、町民に協力して山中に入り、飛行機の燃料にする松根油採りの作業をしたのです。しかし、なんとなく体がだるい。今思うと、白血球が減っていたのです。そのままだったら、急性原爆症が出たかもしれません。ところが、それから1日か2日たった時、当時の上殿村、加計の隣村に居た佐々木弘暢(正規学級38回)君からの伝言がありました。うちへ来て、広島の様子をきかせてほしいと。佐々木君は動員先の被服廠を休んでいて被爆を免れました。あっちでもこっちでも、広島で原爆に遭って死んだという話がある時、表へ出たくなかったので、私を呼んだのだと思います。約8kmの道を歩い

て、彼の家へ行き、自分の見た広島のことを話しました。その時に、彼が家で作った、当時は貴重品のトマトを2つくれたので、かぶりついて食べました。そして、加計町の仮住まいへ帰る途中に、ハッと気がついたら、体がしゃんとした。新鮮な野菜を食べた事が、体に作用したのじゃないか、と思います。

被爆死した**光明君**の話をしませう。彼は姫路中学からの編入でした。当時、男子中学生は軍の学校へ行くのが、一番のお国へのご奉公だ、という時代でした。周りの人は、**光明君**に海軍兵学校を受けなさい、と勧めました。ところが、ご両親、特にお母さんが、軍人だから死ぬことがあると。たまたま学校に届いた通知を見ると、広島に科学学級が出来るらしい。科学の勉強なら死ぬことは無いだろうと、無理やり**光明君**を受けさせたんです。ところが広島では、たった2人亡くなったうちの1人になってしまったのです。ご両親の嘆きは、いかばかりだったかと思います。**光明君**は、頭が良く体も立派な人でしたが、重傷を負って、耳がちぎれかかっています。その**光明君**に肩を貸して、一緒に逃れたのが、広島二中出身の**外林(秀人)君**です。**外林君**の家は舟入の南のほうにありました。途中で元安川と本川があります。ところが、明治橋とか住吉橋のあたりはもう、火の海なのです。それで南の方に回って、修道のあたりに行きました。

明治橋よりずっと下流へ行ったら、船



があったので、**光明君**をかつぎおろして、その船に乗せて渡って。また、本川も同じように船で渡して、土手へ上がったら、仮設の救護所ができてました。それで**外林君**は、自分の家へ連れて帰るつもりだったらしいけれど、医者に診せた方がよいというので、**光明君**を救護所に引き渡したのです。仏教では、菩薩行と言いますが、もしも**外林君**の菩薩行が無かったら、**光明君**は途中で行き倒れて、焼死してしまったか、身元不明の無縁仏になったか、と思います。救護所に引き渡したために、一応、赤チンを塗るぐらいではあったらうけれど、手当てをすることができました。やがて、姫路から列車を乗り継いで、駆けつけたご両親が、あちらこちら探し歩いて、**光明君**を見つめられて。しかし、その時は、もう薬も何もあるわけじゃなし、ただ死んで行くのを見守るだけじゃなかったか、と思います。**河**：でも、お会いになれたのですね。**山**：ええ、死に目には会えました。それは、**外林君**のおかげです。それで、ご両親

親は**光明君**を骨にして、寂しい気持ちで姫路に帰られました。自分達が科学学級にやらなかったら、こうはならなかったと思われたのでしょうか。ご両親はその後、原爆について一言も語らず、姫路から西への旅行には、一切行かなかったそうです。

戦後・そして

その後、10月に4年生の私達は、向島町にあった文理大の臨海実験所に集められ翌年3月の卒業まで、文理大の教授から、授業を受けました。まだ、被爆の傷も十分癒えぬこの時期に、24名の同級生が集まったのは、特筆すべき事だったと思います。

被爆する前に**三村**教授から、「今に、一つの都市を焼き尽くすという、大きな実験が起こると思う。その時に君達は、科学を学ぶ生徒として、冷静な目で見つめてほしい」と言われていました。だが、わずか1.5kmの所から、原子の火を見る事になろうとは、誰も予想できませんでした。

編集を終えて

三村教授は「この度の戦争には、原子爆弾は間に合わないと思う」とも、2～3度言われていたそうです。教授自身、どのような気持ちで、原爆を見られたのでしょうか。

文責・編集：甲斐 稔(63回)

編集補：河本良子(63回)

科学学級同窓会



終戦前後の激動の時期を科学学級で過ごした、1～5回生の合同同窓会が10月29日、東京・南青山のホテルフロラシオン青山で開かれました。

附中科学学級に在籍した18人のほか、金沢高師に付属して県立一中に併置された科学学級出身の2人と関係者1人も参加し、にぎやかな会となりました。

3回生の可部順三郎さん(40回)の司会ではじまり、全員が当時の思い出や近況を語り合いました。

科学学級は、1回生が附中3年生の昭和20年1月、広く全国から公募

して1～3回生までの選抜試験が行われ、1回生31名、2回生31名、3回生34名の入学が決まりました。4回生戸井良治さん(41回)作成の名簿を拝見して驚いたのですが、中国・四国はもとより、東は大阪から西は福岡まで西日本一円から生徒が来ていたのです。

この科学学級設立に情熱を注いだのが、三村剛昂広島文理大教授でしたが、1回生は三村教授のほかに文理大の教授や、広島高師から先生が来て、直接授業を行いました。中学校の4年間に旧制高校2年生並の学力をつけることを一つの目標にしていました。

今回は1回生から初めて3人の参加があり、貴重なお話をうかがうことができました。

文理大や高等師範の先生から直接授業を受けることができたのは、1回生だけのようでしたが、下級生からは「本当に授業についていけたのか」という質問もとんでいました。

せっかくの科学学級でしたが、上級学校への進学が制度的に保障されておらず、三高の試験では、文科系の勉強はまったくしていなかったもので、あまりふるわなかったそうです。

最後に会の名前を「広島高等師範附属中学科学学級関東会」と名付け、来年も集まることを誓い合いました。

当日の出席者は(1回生)植田国昭、江藤哲太郎、山野上純夫、(2回生)佐藤良正、杉岡章、福井宏、(3回生)朝岡卓見、石原巖、小穴雄康、東壽太郎、可部順三郎、(4回生)池田葭哉、戸井良治、松浦功、大隅和雄、(5回生)佐伯康治、藤井恭一、奥出克洋、(金沢高師2回生)池田長康、土田榮作、(同事務局)森下恭子の皆さんでした。

文責：中村 英(57回)

